

破 碎 鏡 か ら の 予 察

長 谷 川 達

1. はじめに

日本書紀に記載される景行紀の周防娑婆の女性首長神夏磯媛や仲哀紀の筑紫岡県主の祖熊罥、伊都県主の祖五十途手が賢木に懸けた鏡・玉・剣はどうなったのか。

漢鏡を基本として集成された埋蔵文化財研究会編集の「倭人と鏡」^(注1)を見ると、いかに漢鏡の多くが割れ、その一部が失われていることに気付く。あるいは、東京国立博物館資料目録には鏡の写真とともにX線写真が併載されている。写真で一見完形と見える鏡においても破碎線、亀裂、欠失部分があり、その頻度は漢鏡に高く、おおよそ魏の台頭以降の中国鏡、仿製鏡に低い傾向があるように見受けられる。製作以来の時間的な長短もあるが、それらの中に意図的に割られた、いわゆる破碎鏡がさらに含まれているのではないかと、^(注2)という想定さえ抱く。ここでは、先学の論証、^(注2)集成を基礎にして、以後の類例を加え「鏡を割る」という行為について考えてみたい。

2. 破碎鏡の概観

弥生・古墳時代の鏡の多くは、土中に埋もれた長い年月の間に錆び、割れている場合が多い。それらが割れた経緯は土圧、木棺・石棺・石槨の崩壊、あるいは乱掘・不時発見の際の行為に伴う結果とされている。その中で破碎鏡・打割鏡等と呼称される鏡は、主にその出土状況によって判断される。接合すれば完形となるものの出土状態から破碎と考えられるもの、接合しても一部が欠落しているもの、破鏡をさらに割っている場合等がある。これらの資料については、いくつかの呼称があるが、本稿では意図的に割られ、完形あるいはそれに近いものを破碎鏡、当初の破断面が摩耗、または二次加工されている鏡片を破鏡と呼ぶこととする。

(1) 類 例

先学の抽出資料と調査担当者の判断を基本としつつ作成したものが第1表である。これらは各報告、そのほかの記述等によって破碎鏡であることや、その可能性が指摘されているもの、出土状況の不自然さが示唆されているものを集めている。第2表は意図的な破碎について言及されていないが、破碎鏡の可能性が高いと考えられる資料である。以下に第

2表の資料の概略について述べる。

瑞龍寺山山頂遺跡は、前方後方形または方形の弥生後期、山中式期の墳丘墓と考えられている。長宜子孫銘内行花文鏡は採取品であるが、後の各種調査から破碎鏡であった可能性が高いとされる。西山4号墳西槨の画文帯神獸鏡、大田南2号墳の画文帯環状乳神獸鏡は、鏡片の散在状況から表に加えた。国森古墳の内行花文昭明鏡は銅質は良いが、手磨れのためか表面は多くの文字が判読不能までに磨滅している。鏡は押し潰れたように出土しているが、一部破片が離れている。報告では、棺の腐朽崩壊に伴うものとされるが、1小片だけが飛び離れるという不自然さから表に加えた。なお、鉄剣も刃部と茎部が離れて出土している。鶴尾神社4号墳の磨滅の激しい補修孔のある方格規矩四神鏡は、伝世鏡論の資料として著名である。1981年の発掘調査によって検出された1片が過去に出土していたものと接合し、当墳からの出土品として確認された。各破片が離れて存在したことがうかがえ、分割副葬と指摘されている。^(注3)破碎とはやや異なるが、同様の意図が考えられる。妙見山古墳は、後方部の竪穴式石槨から斜縁獸帯鏡が2片に割れ、重なった状態で出土しており、朝日谷2号墳の二禽二獸鏡の出土状態に類似している。「倭人と鏡」の集成にはともに完形打割と記載されている。原田遺跡1号石棺墓では、組合式石棺の底石の一部を低くした空間を作り、そこに鏡と折った剣を埋納している。報告で鏡も意図的に破碎された可能性が指摘されている。これは破鏡の母鏡である可能性が説かれた資料である。^(注4)宝満尾遺跡4号土壙墓の内行花文明光鏡は4片に散って出土している。棺側板に立て掛けられていたものが木蓋崩落時に割れたとされるが、その一部が欠落している。

出土状況は、同一棺内または棺内外に散るもの、折り重なるものが多いが、二塚山遺跡の場合、目張り粘土中に入れられるなど、特異な埋納の形もある。以下もやや変わった検出状況のものである。快天山古墳の1号石棺外において、板石と粘土に挟まれた状態で方格規矩四神鏡が出土している。棺外に鉄剣・鉄鏃類もあり、一連の棺外副葬とも受け取れるが、意図的に石で覆い、数十に細片化している状態は単なる粘土、石の重量によるものとするには違和感を覚える。また、その割れ目は古く鏡背の銹化と同様の状態と報告されている。俵ヶ谷4号墳の掘文鏡は、破碎というより一見、縁部の一部を切り取ったような三角形の破片とその他の部分に2分割されたものである。前者は主体部に副葬され、後者は古墳の墳丘下、旧地表面付近に分けて埋められており、破碎鏡の一種として表に入れた。宿東山1号墳の方格規矩四神鏡は割れてはいないが、打撃が加わっているもので、X線写真によって蜘蛛の巣状に広がる亀裂を見ることができる。事故等による打撃痕である可能性も否定できない。

報告書等によって破碎鏡、あるいはそれに準ずるものを抽出したが、可能性はあるもの

の確認できなかったものもあり、出土時期が古く確認し得ないものはさらに多い。

(2) 分布

破砕鏡の分布は、第1・2表のとおり、銅鏡の流入が早く、保有量も多い北部九州と近畿北部にやや集中するが、ほかは一地域に偏することなく東は関東地域に及ぶ。近畿北部については、筆者の居住地周辺ということから、情報が密となった結果という感も否めない。さらに確認はできなかったが、前期古墳の構築される東北地域に及ぶ可能性も高い。このことから鏡を破砕するという行為が、一定地域の特殊な葬送儀礼ではないことが分かる。また、一地域、あるいは同一古墳群において長く継続して行われることもない。

鏡の出土例が多いにもかかわらず、大和及びその周辺の例はほとんどない。また各地における盟主的な大型の前方後円墳にも、調査例が少ないこともあるが見当たらない。ただ、桜井茶臼山古墳の破鏡の可能性が指摘されている内行花文鏡^(注5)、椿井大塚山古墳の破断面が古く、大量の三角縁神獸鏡との副葬位置を含めた相違が述べられている手ずれの著しい内行花文鏡^(注6)や京都府蛭子山古墳の石枕付近に散っていたとされる紋様が曖昧模糊とした内行花文鏡^(注7)などに疑いを持つが、確認する方法もない。

(3) 埋納の時期

確認例では、弥生時代後期中頃の佐賀県二塚山遺跡の例が古い^(注8)が、それ以前の鏡も割れているものが多く、弥生後期前半とされる福岡市宝満尾遺跡の欠落部のある内行花文明光鏡等を加えるならば、その初現はさらに溯る。また、出土経過に問題はあ^(注8)るが、後期山中式期に位置付けられる岐阜県瑞龍寺山山頂遺跡例を破砕鏡とすれば、比較的早い時期に北部九州以外においてもこの行為が行われたこととなる。以後、時間幅はあるものの、全体には各地域において弥生時代末、古墳発生期、あるいは古墳時代初頭とされる墳墓・古墳に例が多く、ほぼ古墳時代前期の範疇で終息する。

(4) 鏡の種類

破砕鏡の鏡種は、墓に副葬される時期は別にして、古いものでは、内行花文日光鏡・昭明鏡等、異体字銘帯鏡の一群から始まり、ほぼ後漢末の鏡までが基本的に対象となっており、鏡種の厳選されていることが指摘されている。仿製鏡とされるものは、弥生小型仿製鏡の一群も含め、原則として対象となっていないが、平原墳墓における大型内行花文鏡は、明確に破砕されている。また、三角縁神獸鏡に代表される大和政権によって配布されたと考えられる鏡は原則として対象となっていない。これらの点から破砕される鏡は、大和政権の勢力が及ぶ以前に入手、あるいは製作されていた鏡ではないかと考えられる。その多くは漢鏡であり、仿製鏡であっても、大和政権勢力下以外の地域から、各地にもたらされていたものである可能性が高い。鏡種によっては相当期間保持されており、その鏡背紋様

が不鮮明になっているものも多い。ただ、三角縁神獸鏡以前の神獸鏡系の鏡については、初期大和政権を含めた複数のルートによる舶載も想定される。

一覧表では、仿製鏡と考えられる美濃観音寺山古墳の重圏文鏡、俵ヶ谷4号墳の振文鏡源氏山4号墳の珠文鏡を抽出したが、逆にそれらを一連の破碎鏡と同列に扱うべきか、あ

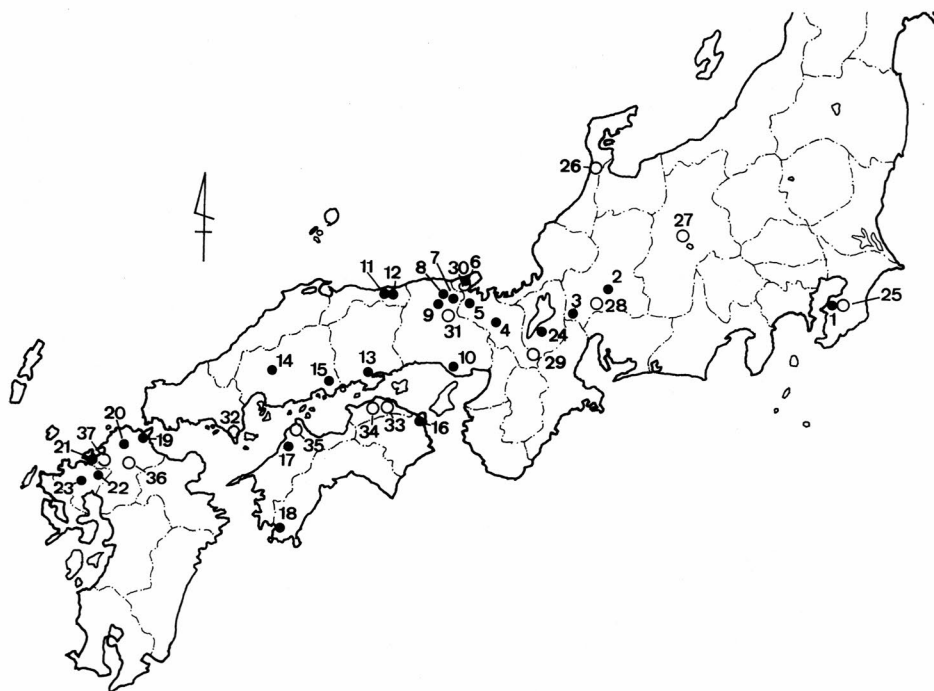
第1表 破碎鏡出土地一覧表(1)

番号	遺跡名	墳形	規模(m)	鏡種	遺跡所在地	伴出遺物・備考	文献
1	高部30号墳	前方後方墳	34	二神二獸鏡	千葉県木更津市請西	鎧・朱塊	1
2	美濃観音寺山古墳	前方後方形	20.5	方格規矩四神鏡・重圏文鏡	岐阜県美濃市横越	玉類	2
3	象鼻山1号墳	前方後方墳	42.8	双鳳文鏡	岐阜県養老郡養老町	琴柱形石製品・鏃・劍	3
4	園部黒田古墳	前方後円墳	52	双頭龍文鏡	京都府船井郡園部町	鏃・管玉	4
5	寺ノ段2号墳	方墳	15	方格規矩鏡*	京都府福知山市天田	ガラス管玉	5
6	愛宕神社1号墳	方墳	20	四獸鏡	京都府竹野郡弥栄町	刀・劍・斧・鏃・玉類・鏡片	6
7	入佐山3号墳	方墳	36×23	方銘四獸鏡	兵庫県出石郡出石町	劍・鏃・砂鉄・斧・内行花文鏡	7
8	深谷1号墳	方墳	21×19	内行花文鏡*	兵庫県豊岡市中ノ郷	針状鉄製品	8
9	源氏山4号墳	楕円墳	17×13	珠文鏡	兵庫県養父郡八鹿町	管玉 鏃 斧	9
10	西条52号墓	円丘	15	内行花文鏡	兵庫県加古川市西条	劍	10
11	桂見2号墳	方墳	28×22	内行花文鏡 獸帯鏡	鳥取県鳥取市桂見	刀・刀子・鏃状鉄製品・鉞・針状鉄製品	11
12	面影山74号墳	方墳	20×16	内行花文鏡	鳥取県鳥取市正蓮寺	玉類	12
13	鑄物師谷1号墳	方形低墳丘	20	爬龍文鏡	岡山県都窪郡清音村	玉類	13
14	中出勝負峠8号墳	円形	15	内行花文昭明鏡	広島県山県郡千代田町	鏃・槍・斧・玉類	14
15	石鎚山2号墳	円墳	16	内行花文鏡・内行花文鏡*	広島県福山市加茂町	刀子・鉞	15
16	萩原墳墓	方丘付円丘	26.5	画文帯同向式神獸鏡	鳥取県鳴門市大麻町	管玉・鉞	16
17	朝日谷2号墳	前方後円墳	30	二禽二獸鏡・二神二獸鏡	愛媛県松山市朝日ヶ丘	鏃・銅鏃・刀・劍・斧・鉞・小玉	17
18	高岡山古墳	円墳	18	内行花文明光鏡	高知県宿毛市平田町	石釧・玉類	18
19	高津尾遺跡16区	40号土壙墓		方格規矩渦文鏡	福岡県北九州市小倉南区	---	19
20	汐井掛遺跡	4号石棺		方格蕨手文鏡	福岡県鞍手郡若宮町	---	20
21	平原1号墓	方形周溝墓	18×14	方格規矩四神鏡他	福岡県糸島郡原原町	玉類	21
22	二塚山遺跡	76号甕棺墓		内行花文昭明鏡	佐賀県神埼郡東脊振山	---	22
		29号石蓋土壙墓		獸帯鏡		---	22
23	寄居S T01古墳	円墳	15~12	方格規矩四神鏡	佐賀県小城郡小城町	劍	23
24	伊勢遺跡	小土壙		素文鏡	滋賀県守山市伊勢町	玉類	24

*印は破鏡、鉄器類の名称の「鉄」は省略している。

第2表 破碎鏡出土地一覧表(2)

番号	遺跡名	墳形	規模(m)	鏡種	遺跡所在地	伴出遺物・備考	文献
25	俵ヶ谷4号墳	方墳	11.6	捩文鏡	千葉県木更津市小浜	玉類	25
26	宿東山1号墳	前方後円墳	21.4	方格規矩四神鏡	石川県羽咋郡押水町	—	26
27	中山36号墳	円墳	20	獸帯鏡	長野県松本市中山	鍔・劍	27
28	瑞龍寺山山頂遺跡	前方後方形	35	内行花文鏡	岐阜県岐阜市鷺谷	管玉	28 29
29	西山4号墳	円墳	25	画文帯神獸鏡	京都府城陽市久世	内行花文鏡・鍔・玉類	30
30	大田南2号墳	方墳	22×18	画文帯環状乳神獸鏡	京都府峰山町・弥栄町	劍・不明鉄製品	31
31	向山2号墳	方墳		内行花文鏡	兵庫県朝来郡和田山町	鉈	9
32	国森古墳	方墳	27.5×30	内行花文昭明鏡	山口県熊毛郡田布施町	劍・槍・鉾・鍔・鑿・針 ヤス	32
33	鶴尾神社4号墳	前方後円墳	40	方格規矩四神鏡	香川県高松市西春日町	管玉	33
34	快天山古墳	前方後円墳	100	方格規矩四神鏡	香川県綾歌郡綾歌町	石釧・玉類・鉄器多数	34
35	妙見山古墳	前方後円墳	56	獸帯鏡	愛媛県越智郡大西町	鉈	35
36	原田遺跡	1号石棺墓		單夔文鏡	福岡県嘉穂郡嘉穂町	劍	36
37	宝満尾遺跡	4号土壙墓		内行花文明光鏡	福岡市博多区下月隈	—	37



第1図 破碎鏡分布図(●; 第1表、○; 第2表に対応)

るいは一連の仿製鏡であるのか等、検討の余地を残す。また、伊勢遺跡例は唯一の集落跡出土品である。弥生時代後期の大型建物で著名だが、この小土壙は古墳時代前期に属する。

3. 畿内の要素との関係

北部九州の群集する土壙墓、石棺墓の破碎鏡には供伴遺物が少なく、その棺に鏡が副葬される理由を周辺墓壙との関係の中で明確に読み取ることはできない。しかし、初期、あるいはそれ以降の古墳の場合、供伴遺物や古墳周辺に、いわゆる畿内のともいえる要素が見られる。遺物としては大和・畿内政権が管理し、配布したと考えられる三角縁神獸鏡や仿製鏡などの鏡類、定型的な鉄鏃・銅鏃・石製品などであり、遺構としては前方後円形・円形である。破碎鏡出土古墳とその周辺に見られる畿内の要素を挙げてみたい。

(1) 同一主体部内

象鼻山1号墳では琴柱形石製品2点、大・小型柳葉式・定角式鉄鏃44点、園部黒田古墳には柳葉式鉄鏃がある。入佐山3号墳の方銘四獸鏡は破碎される一方、仿製内行花文鏡は破碎されず、定角式・柳葉式鉄鏃も16点副葬されている。朝日谷2号墳では、破碎後、重ね合わせて置かれていたことが想定されている二禽二獸鏡と、やや散っている斜縁二神二獸鏡とともに、柳葉式銅鏃44点、定角式・鑿頭式鉄鏃20点などがある。中出勝負峠8号古墳は、鏡背表面の摩耗が著しい内行花文昭明鏡とともに、定角式・柳葉式鉄鏃11点がある。

(2) 同一古墳内

中ノ郷深谷1号墳では、組合石棺・木棺直葬・土器棺、合計10基の主体部があり、中心的な組合式箱式石棺を持つ第2主体部で、内行花文鏡の紐部分の破鏡をさらに破碎し、第四主体部では仿製内行花文鏡が完形で副葬されている。畿内で唯一抽出した西山4号墳には東西2基の主体部があり、西槨に破碎されたと考えられる画文帯神獸鏡と玉類、鉦が棺北側に、南側に仿製内行花文鏡が副葬されていた。また、東槨からは30点の柳葉式銅鏃が鉄剣等とともに出土している。さらに一辺約25～27m方墳である2号墳の3基の主体部からは三角縁神獸鏡・四獸形鏡・石釧・曲がった剣・石杵等が出土している。快天山古墳では、後円部に石枕を造出した刳抜式の石棺が3基検出されている。調査以前に掘られたものもあり、副葬品の全容は不明だが、1号石棺外には柳葉式鉄鏃や石釧などがあり、2・3号石棺内から仿製内行花文鏡が出土している。

(3) 同一古墳群内

石鎚山古墳群では、2点の破鏡を破碎している2号墳に隣接する1号墳の2基の竪穴式石室と周辺から定角式・鑿頭式鉄鏃や柳葉式銅鏃、完形の二神二獸鏡などが出土している。1号墳は埋葬施設、副葬品ともに畿内の様相を示し、それより前時代的な要素を持つ2

号墳が条件の劣る位置に立地しており、報告では両墳の先後関係について苦慮されている。高岡山2号墳は、地山整形の墳丘で、礫榔内から、内行花文明光鏡や補修孔のある石釧、玉類が出土している。銅鏡と石釧は散在して検出され、報告では破砕鏡とは断定されていないが、鏡・石釧の出土状況の不自然な点に言及されている。また、1号墳は盛土で墳丘が築かれ、副葬品にはやや異形の筒形銅器がある。大田南古墳群では、2世紀後半製作の画文帯環状乳神獸鏡が割れ、劍は曲げられている2号墳に対し、5号墳^(注9)の青龍三年銘方格規矩四神鏡や鉄刀は完形である。

(4) 近傍の古墳

高部古墳群では、32号墳で四獸鏡の破鏡、30号墳で破砕した二神二獸鏡を相次いで副葬している。その近くには、時期的にやや隔たりがあるが、三角縁神獸鏡・四獸鏡、銅鏃、車輪石等を出土した全長60mの前方後円墳の手古塚古墳^(注10)がある。寺ノ段2号墳の同一丘陵に約600m離れて景初四年銘盤龍鏡を持つ広峯15号墳^(注11)がある。この古墳は、この地域で初めて前方後円形を採用した古墳である。萩原1号墓は画文帯同向式神獸鏡が破砕され、管玉も割られており、匏もその可能性が考えられている。墳丘が不定形な前方後円形をしているが、後の前方後円墳につながるものかは不明である。鶴尾神社4号墳は前方後円墳で石清尾山古墳群の一画にあり、古墳群中最初期の古墳の一つとされる。

確認できなかったため一覧表には記載しなかったが、破砕鏡と疑わしい鏡を出土している古墳で類似する状況が認められる。長野県松本市では、約20mの円墳の中山36号墳から約6分の1を欠落した六乳神獸鏡が出土し、谷を隔てて対峙する位置に弘法山古墳^(注12)がある。中山36号墳は調査以前に乱掘されたこともあり、鏡と土器、鉄製品1点という副葬品であるが、後者は劍、斧、柳葉式銅鏃・定角式鉄鏃や四獸鏡を持っている。なお、弘法山古墳の四獸鏡も写真では、紐周辺の一部が欠落している。群馬県北山茶白山西古墳^(注13)からは、欠落部のある方格規矩四神鏡や鉄鉾が出土し、その東100m足らずの地点には、約40mの円墳と推定される北山茶白山古墳がある。この古墳は三角縁神人車馬画像鏡や石釧を出土し、富岡市内で最も古い古墳とされるものである。ただ、この方格規矩四神鏡は仿製鏡とされ、鏡周辺の土は後世、二次的に動いているとされる等の問題がある。

以上のように破砕鏡が検出された古墳の多くとその周辺に大和政権によって配布された新たな威信財ともいべき品々が見られるが、その関係は多様である。同一棺内にある場合は、複数埋葬を考えなければ鏡保持者自身が受け取っている。同一古墳内の別主体部や同一古墳群内の場合は、時期的に後続、あるいは前後する近親者が受けたことが考えられる。この場合、血縁関係のある者だけではなく、同一集団内で鏡保持者と政治的指導者が異なる、職掌の相違による結果の可能性もある。近傍の古墳の場合、同一地域でより広域

に強権を持つ者に配布されたことも想定できるが、後続世代の場合も考えられる。時期が古く、その時期としては相応の規模を持ちながら破砕鏡と若干の鉄器・玉しか副葬されず、また、畿内的な品もない高部・美濃観音寺・萩原などの場合、次世代での威信財の授受も考えられるが、大和政権による威信財配布システム成立以前に行われた破砕行為かもしれない。

4. 破砕鏡の意味

(1) 発生と伝播

大小各集団の、あるいはその統率者たちの象徴として銅鏡を所持し、墓に埋納する風習は、九州北部に始まる。やがて、弥生時代後期には、破砕鏡も含めてその数は増加する。そうした状況の中で「鏡を割る」という行為が生み出されたと考えられる。しかし、九州北部の中だけで、その流れを明確に追える資料を選択しきれておらず、検討の余地を残す。また、鏡類は完形で副葬される場合もあり、破砕することは決して普遍的なものではない。「鏡を持つ」という一定の価値観を持つ各集団において、副葬に際してそれを割るか、否かという大きな相違が生じている。それが集団・個人ごとに異なる死生観、鏡に対する思いの相違等によるものとは考えられない。割らざるを得ない状況が生じた理由として、外的要因が大きな比重を占める可能性を推測できる。その契機としては、地域間の抗争・統合の過程における服属・帰属に際しての行為を想定ができる。葬送儀礼というより政治的儀礼として位置づけたい。

九州で生み出された「鏡を割る」という儀式ともいえる行為は、やがて畿内・大和政権に受け継がれる。弥生時代後期以降、鉄器・ガラス製品等、大陸の製品や原材料を大陸に求めなければならない品々が日本各地で、徐々にではあるが確実に増加している。そうした中で、北部九州以外においても相当数の首長たちが破砕鏡も含め、鏡を入手していたことが、古墳に副葬される鏡や集落出土の破砕鏡等からうかがえる。それらが畿内・大和政権の全国への勢力伸張に際し、各地域の首長は連帯、服属の証しとして、長く保持してきた首長あるいは集団の象徴ともいえる品々の、破砕もしくは保持の停止を受容したと考えられる。北部九州における破砕鏡の例も弥生時代末以降のものが多く、九州内部での問題で生じたものより、畿内・大和勢力との関係によるものが多い可能性が高い。その関係の顕著な事例として平原墳墓があり、それがやがて大和政権による鏡類の一括供給の道を開く端緒の一つになったことも想定できる。

(2) 新たな威信財

帰属・服属、あるいは連帯の証しとして、鏡等を破砕し、または保持し続けることを停

止して副葬し、その代償として与えられたのが、三角縁神獸鏡に代表される新たな鏡であり、定型化した鉄鏃・銅鏃等の金属製武器・武具や石製腕飾類、玉類等の大和政権の管理下で配布された威信財である。これら象徴的器物の管理が政治的主導権の獲得と維持にとって重要な戦略とされることと、鏡等の破碎は表裏一体ともいえる。新たな威信財の種類と組み合わせは千差万別であり、対象となった首長の大小、強弱、大和政権にとっての各種の有為性の多寡等によって、時期的にも種類・量を変化させつつ、何らかのパターンのもとに選択されたと考えられる。

新たな品々は、かつてのように伝世されることなく、首長個人に帰属する性格を強め、首長の死とともに副葬される。大和政権にとっては、それだけに次々と新しい製品を供給しなければならない事態も生じたと考えられる。原材料や生産集団の確保、維持に費やす労力も多大であり、やがて製品の粗製化を招く。そして時代の変化の中で、多種多様な威信財の幅広い配布を必要としない社会に移行していったことが考えられる。

(3) 鏡以外の品々の破碎と放棄

鏡の破碎行為とともに、鉄器の破壊行為が存在する。これも破碎鏡と同義の行為と考えられる。すでに九州・西日本を中心に集成し、提示されているが、同様の行為は破碎鏡の分布域を越えてさらに広がる可能性が高い。破碎鏡を出土した古墳とも一部重複しつつ、やはり絶対量の少ない鏡以上に類例を増すものと思われる。鏡。鉄器、あるいは一部の玉類等も加え、全体の広がりを見るべきものかもしれない。

これら一連の行為は、大和から正確な同心円状に広がった訳でもなく、一度の遭遇によって一定地域の全てが決したとも考えられない。地理的・政治的な距離の遠近によって状況は異なるが、波状に押し寄せつつ、やがて深くに浸透する過程において、あるものは副葬という形で埋納され、所持し続けることを恐れるかのように手放されていったと考えられる。弥生時代末から古墳時代前期にかけて、住居跡・溝・包含層などから、忘れられ、あるいは投棄されたかのように出土する破鏡・銅釧・中国貨幣等も、そのような時代を反映している。

(4) 破碎されなかった鏡

鏡に象徴される各地域の大小首長の所持する品々が割られてゆく中、割られずに古墳に副葬される漢鏡も多く、中には後期古墳に至って副葬される例さえある。破碎鏡を持つ古墳等は、その大半が中小規模のものであり、そこに葬られた首長たちの地位を現している。大和政権にとって一級の威信財ともいえる三角縁神獸鏡とともに破碎鏡を同一棺内外に副葬した確実な例はない。可能性として三角縁神獸鏡の配布を受けるクラスの首長の多くは、保持してきた鏡類に対して伝世の停止は約するが、破碎という形をとることを求められな

かったとが考えられる。それらは、大和政権の中枢において、その一翼を担った人々であり、各地で広域に強力な支配力を持つか、大和政権の勢力伸張にとって不可欠な首長たちである。「より重視される鏡」として論述されるように、黒塚古墳の画文帯神獸鏡、黄金塚古墳中央櫛の斜縁神獸鏡^(注17)、紫金山古墳の方格規矩四神鏡^(注18)、園部垣内古墳の盤龍鏡^(注19)など、三角縁神獸鏡等とは別に配置されたり、下池山古墳の大型内行花文鏡のように、主体部とは別に石槨を設けて埋納される鏡など、特別ともいえる扱いをされている鏡が、大和や畿内の古墳、あるいは各地の広域な盟主墳などに見られる。これらは、鏡を割る必要がなかった人々とはいえ、前時代から丁重に保持されてきた鏡に対し、保持を停止するに際しての意を尽くした形なのかもしれない。ものが見事に割れた大和天神山古墳^(注20)の23面の鏡も報告で奉獻品としての性格を持つ可能性も示唆されているが、破碎鏡、あるいは前時代の鏡に対する特別な扱いの経緯の中に位置付けたい資料である。

なお、小稿の作成にあたって、加藤晴彦、木野本和之、佐藤晃一、瀬戸谷皓、谷本 進、田端 基、野島 永、服部芳人各氏に御教示、文献探索などの御協力をいただきました。記して感謝致します。

(はせがわ・いたる＝京都府立丹後郷土資料館主任)

- 注1 埋蔵文化財研究会編『倭人と鏡』(第35回埋蔵文化財研究集会) 1994
- 注2 小山田宏一「破碎鏡と鏡背重視の鏡」(『弥生文化博物館研究報告』第1集 大阪府立弥生文化博物館) 1992
- 注3 北條芳隆「讃岐型前方後円墳の提唱」(『国家形成期の考古学』 大阪大学考古学研究室10周年記念論集) 1999
- 注4 藤丸詔一郎「破鏡の出現に関する一考察」(『古文化談叢』第30集(上)九州古文化研究会) 1993
- 注5 今尾文昭「古墳と鏡」(『季刊考古学』43 雄山閣) 1993
- 注6 樋口隆康『昭和28年椿井大塚山古墳発掘調査報告』(『山城町埋蔵文化財調査報告書』第20集 山城町教育委員会) 1998
- 注7 梅原末治「桑飼村蛭子山・作り山両古墳の調査」(『京都府史蹟名勝天然記念物調査報告』第14冊 京都府) 1933
- 注8 森岡秀人「近畿地方における銅鏡の受容」(『季刊考古学』43 雄山閣) 1993
- 注9 横島勝則・丸山次郎『大田南古墳群発掘調査報告書』(『京都府弥栄町文化財調査報告』第15集 弥栄町教育委員会) 1998
- 注10 参考文献25
- 注11 参考文献5
- 注12 「弘法山古墳」(『長野県史考古資料編』 長野県史刊行会) 1983

- 注13 田口正美『北山茶臼山西古墳』(『群馬県埋蔵文化財調査事業団報告』第78集 (財)群馬県埋蔵文化財調査事業団) 1988
- 注14 福永伸哉「古墳時代前期における神獸鏡製作の管理」(『国家形成期の考古学』大阪大学考古学研究室10周年記念論集) 1999
- 注15 佐々木隆彦「折り曲げた副葬鉄器」(『九州歴史資料館研究論集』23 九州歴史資料館) 1998
- 注16 中村潤子「出土状況から見た三角縁神獸鏡」(『同志社大学考古学シリーズⅦ 考古学を学ぶ』同志社大学考古学シリーズ刊行会) 1999
- 注17 末永雅雄・島田暁・森 浩一『和泉黄金塚古墳』(『日本考古学報告』第5冊 日本考古学協会) 1954
- 注18 京都大学文学部考古学研究室編『紫金山古墳と石山古墳』(京都大学文学部博物館) 1993
- 注19 森 浩一編『園部垣内古墳』(『同志社大学文学部考古学調査報告』第6冊 同志社大学文学部文化学科) 1990
- 注20 伊達宗泰・小島俊次・森 浩一「大和天神山古墳」(『奈良県史跡名勝天然記念物調査報告』第22冊 奈良県教育委員会) 1963

参考文献

1. 小沢 洋「千葉県木更津市高部30・32号墳」(『日本考古学年報』47 日本考古学協会) 1996
2. 高木宏和「岐阜県観音寺山古墳」(『季刊考古学』52 雄山閣) 1995
3. 岡田一広・西村倫子ほか『象鼻山1号墳』(『養老町埋蔵文化財調査報告』第2冊 富山大学人文学部考古学研究室) 1998
4. 森下 衛・辻川哲朗・高野陽子『船坂・黒田工業団地内遺跡群発掘調査概報』(『園部町文化財調査報告書』第8集) 1991
5. 崎山正人『駅南地区発掘調査報告書』(福知山市教育委員会) 1989
6. 竹井治雄「愛宕神社古墳」(『京都府遺跡調査概報』第83冊 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 1998
7. 小寺 誠「入佐山古墳群」(『兵庫県史』考古資料編 兵庫県) 1992
8. 瀬戸谷皓『中ノ郷深谷古墳群』(但馬考古学研究会) 1985
9. 第17回両丹・但馬考古学研究会交流会資料 1999
10. 櫃本誠一「西条古墳群」(『兵庫県史』考古資料編 兵庫県) 1992
11. 船井武彦・平川誠・杉谷美恵子『桂見墳墓群』(『鳥取市文化財調査報告書』18 鳥取市教育委員会) 1984
12. 船井武彦・平川誠『面影山古墳群・吉岡遺跡発掘調査概要報告書』(『鳥取市文化財報告書』22 鳥取市教育委員会) 1987
13. 近藤義郎「鋳物師谷1号墳墓」(『岡山県史 考古資料』岡山県) 1986
14. 向田裕始『歳ノ神遺跡群 中出勝負峠墳墓群』(『広島県埋蔵文化財調査センター調査報告書』第49集 (財)広島県埋蔵文化財調査センター) 1986

15. 高倉浩一『石鎚山古墳群』(財)広島県埋蔵文化財調査センター) 1981
16. 菅原康夫『萩原墳墓群』(徳島県教育委員会) 1983
17. 梅木謙一『朝日谷2号墳』(『松山市文化財調査報告書』63 松山市生涯学習振興財団埋蔵文化財センター) 1998
18. 山本哲也『高岡山古墳群発掘調査報告書』(高知県教育委員会) 1985
19. 柴尾俊介『高津尾遺跡4』(『北九州市埋蔵文化財調査報告書』第102集 北九州市教育文化事業団) 1991
20. 池辺元明編『九州縦貫自動車道関係埋蔵文化財調査報告書』X X VIII(福岡県教育委員会) 1979
21. 原田大六『平原弥生古墳』(平原弥生古墳調査報告書編集委員会) 1992
22. 七田忠昭『二塚山』(『佐賀県文化財調査報告書』第46集 佐賀県教育委員会) 1979
23. 高瀬哲郎『寄居遺跡』『老松山遺跡』(『九州横断自動車道関係埋蔵文化財発掘調査報告書(10)』佐賀県) 1989
24. 松浦俊和・福多紋子『近江の古代を掘る』(大津市歴史博物館) 1995
25. 小沢洋『小浜遺跡群I 俵ヶ谷古墳群』(『君津郡市文化財センター報告』37 (財)君津郡市文化財センター) 1988
26. 北野博司『宿東山遺跡』(石川県立埋蔵文化財センター) 1987
27. 長野県編「中山36号墳」(『長野県史考古資料編 長野県史刊行会) 1983
28. 榑崎彰一・山田友治「岐阜市瑞竜寺山山頂出土の古鏡について」(『考古学雑誌』53巻1号 日本考古学会) 1967
29. 赤塚次郎「瑞竜寺山山頂墳と山中様式」(『弥生文化博物館研究報告』第1集 大阪府立弥生文化博物館) 1992
30. 樋口隆康・小泉裕司「西山4号墳」(『城陽市史』第3巻 城陽市) 1999
31. 肥後弘幸『大田南古墳群』(『京都府弥栄町文化財調査報告』第7集 弥栄町教育委員会) 1991
32. 乗安和二三『国森古墳』(田布施町教育委員会) 1988
33. 藤井雄三・渡辺明夫『鶴尾神社4号墳調査報告書』(高松市教育委員会) 1983
34. 和田正夫・松浦正一「快天山古墳発掘調査報告書」(『香川県史跡名勝天然記念物調査報告』15 香川県) 1951
35. 『妙見山古墳発掘調査概報Ⅲ』(大西町教育委員会・愛媛大学考古学研究室) 1994
36. 福島日出海『嘉穂地区遺跡群Ⅳ』(『嘉穂町文化財調査報告書』第7集 嘉穂町教育委員会) 1987
37. 山崎純男『宝満尾遺跡』(『福岡市埋蔵文化財調査報告書』第26集 福岡市教育委員会) 1974